

# 論文審査の結果の要旨

令和元年 11 月 6 日

課程博士 ○論文博士	臨床教育学	(ふ り が な) 学位請求者氏名	かとう えみこ 加藤 恵美子
論 文 題 目	思春期の「自己」の形成を支える詩の創作と読み合いについての研究		
審 査 員 (3名以上)			
主 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	
上田 孝俊 印	安東 由則 印	河合 優年 印	
論 文 審 査 要 旨			
<p>1. 研究の目的と方法</p> <p>本研究は、筆者が 1990 年代から実践してきた中学校選択教科国語および国語科における詩の創作活動をもとに、思春期の「自己」の形成を支える詩の創作と読み合いの意味、教育実践における意義について検討した実践的研究である。</p> <p>本研究の目的は第一に、思春期の子どもたちが紡ぎ出していった「詩的表現」の特質を検討し、子どもたちが自らの情動・感情と向き合い、それを対象化し言語化する過程を考察することである。第二に、思春期の子どもたちの「自己」の形成において、詩の創作とその読み合いが持つ意味、特に現代の中学生にとって、これらの実践が教育全体に持つ意味について論考することである。第三に、思春期の子どもたちの詩の創作活動を支える教師の役割と「指導」のあり方を検討し考察することである。</p> <p>そのために、筆者の詩の創作活動の実践を4名の生徒の作品過程に絞って詳説し、作品に含まれる文脈と表現されるメッセージを解釈するとともに、それぞれに聴きとり調査をおこない、筆者の解釈の精緻化を図るとともに、思春期においてこれらの作品が書かれたことの意味するところやその後の人生に詩作が与えた影響について考察した。一方、情動や感情の表出が思春期の教育実践としてどのように位置づけられたか筆者の実践の論考と比較検討するため、①1970～80年代における東京の中学校教師・桐山京子による詩作を通しての生徒への個別的な支援と、②2006～2017年に奈良少年刑務所で社会性涵養プログラムとして取り組まれた、詩人・寮美千子も参画しその内容を上梓した少年たちの詩作とその読み合いの実践を取り上げた。桐山とその実践で取り上げられた生徒からも聴き取りをおこない、それぞれの実践から考察した詩の創作と読み合いに関わる概念の共通と相違を検討した。</p> <p>2. 論文の構成と内容</p> <p>序章では、長年中学校国語科の教員として、とりわけ詩に関心をおき授業実践を積み上げてきた筆者は、言語化が難しい思春期の情動や感情を、自ら言葉を探り、自分とは何かを問おうとする生徒の姿勢がその実践の過程で見られたという本研究への問題意識を述べる。現在の教科学習において、思春期の人格形成に関わる課題、とくに自己否定観が強まるこの時期の「負の情動」を受容する視点が希薄であるという点や、詩の創作に関わる学習が言語や文体の技法に偏る傾向にあるという点などを克服する実践の模索や探求として、本研究を位置づけている。</p> <p>第1章では、桐山京子の実践を取り上げ、とくに困難な育ちと学習不適応を抱えた生徒と教師の共同による詩の創作活動が意味したところを検討した。筆者は、桐山がその生徒に自分の内面を表す言葉を探らせ、言葉の意味を「共同批評者」として応答していたと捉えた。その応答が、生徒に生活史からくる怒りや憤りだけでなく、生徒の内面に抑え込まれていた他者と共に生きたい「本当の自分」を表出させることにつながったと述べる。多面的な「自己」を自分で認識し、他者に共感されるという詩の創作の教育的意味を考察している。</p> <p>第2章では、寮美千子が少年受刑者におこなった「詩の教室」の事例について検討した。筆者は、少年たちが、自分の感情を素直な言葉にし、また他者の詩に同感を感じて発言・応答し合えたのは、犯罪の背景にあった家族関係や環境を共有できたところにあり、また素直に表出できる「場」が寮</p>			

や少年刑務所の教育担当専門官によって保障されていたことの、この二つの点を「読み合い」が成立する条件ととらえた。寮の言葉では「有機的な交流」と捉えられているが、それは日常的な生活から離れた「異化」できる場としてあったことにも注目した。

第3章では、筆者の選択教科国語や国語科の授業を対象化して取り上げ考察している。生徒たちは詩作の過程で、思春期の身体的・心理的变化、親密な他者や自分にすら感じる違和感、それによる葛藤や不安感・孤立感を照射する言葉を探り、選択・再考し、「読み合い」を仮定して他者にも通じる表現を探究した。それによりあるべき自分とあってよい自分という対照的な「自己」の存在を確認し、同時に、「読み合い」を通して自己の葛藤を含めた存在が認められ、自他による「自己」像の統合がはかられていくことが確認できた。さらに、成人に至る過程で自我の確立が図られると、詩的な表現から遠ざかるという研究協力者も見られたことから、思春期という時期の詩作の特質も論じられた。

終章では、詩の創作活動とその「読み合い」について、先行研究を踏まえたまとめの論考をおこなっている。詩の一語一語のもつ「具体的な文脈がそぎ落とされた象徴的なイメージ」すなわち「メッセージ」は、読み手の「自分の『コンテクスト』に当てはめ」た解釈を通して受けとめられていくこと、また思春期という世界での体験的理解に基づくメッセージの共有を Jakobson のいう「コード」の概念から読み解くことができ、筆者は「読み合い」のなかで生成される自己と他者の相互作用を「心理的接触」として意味づけた。すなわち思春期においてもっとも気を配り、傷つきの要因ともなる「孤立」への教育的働きかけとして、「心理的接触」が有効であり、詩の創作活動の教育的意味がそこにあると結論づけた。教師の指導については、生徒の生活世界を探り、彼らの葛藤の場を共有してくれる「共存的他者」としての教師の存在、それは同時に教師側からすれば生徒の生活世界を共有できるのかという自問であり、それを認識した上で作品を生徒の感情・情動と応答させながら共に読み解こうとする「共同批評者」の二面からその役割が位置づけられると結論づけた。

### 3. 審査の結果

#### 1) 本論文の評価

本論文は、中学校において筆者自身が長年取り組み、丹念に積み上げてきた授業実践事例に基づく研究であり、類似の実践との比較考察を含め、研究目的に対しての論述に一定の説得力をもつ臨床教育学的研究としての独創性が確認できる。自身の実践を客観的に資料から整理し、叙述し、検討するためには、事象を位置的・時間的に相対化して解釈することが求められる。そのため本論文では、生徒たちに聴き取り調査をおこない、中学生のとき、その後の人生の、二つの側面からの詩の授業や詩作の意味を検討するという研究スタイルをとる。綴方教育実践やその研究において、「書かせることの意味」を将来（未来）に向けて問い、「書かせたことの意味」を現在から問い直すことが課題として俎上しているが、そうした課題に迫る研究の一つと本論文を位置づけることができる。同時に、思春期教育という視点から教科教育の内容とその方法にどのように迫るのかという、今日の生徒の心理的状況を範疇にいた実践の検討という研究課題に応える論文としても評価できる。

#### 2) 本研究の今後の課題

本研究について、思春期の「自己」や「発達」に関わる教育学・心理学での研究の歴史を踏まえ、どのような視点から実践を照射し、論じるかをいっそう明確にすることが今後の課題となろう。すなわち、筆者が研究対象とする実践を検討するための用語やその定義づけが、先行研究に鑑み妥当であるかどうかのさらなる検証が必要と思われる。この分野の研究や実践が十分に進んでいるとは思えないのもそこに要因があると推測するが、筆者の研究課題として思春期教育とそれに呼応する教科実践を探究していったほしい。

#### 3) 審査過程

2019年7月5日の第1次審査（臨床教育学研究科（博士後期課程）委員会）において書類審査をおこない、博士後期課程満期退学生論文博士学位請求論文提出要件を充足していることを確認した。7月13日の第2次審査（主査・副査による学位請求者に対する質疑応答と審査）においては、修正を条件として合格と判定した。この結果を、8月2日の第3次審査（論文審査委員会）によって審査し、修正事項の追加を指摘した上で、期日までに修正をおこなうことを条件に「合格」と判定した。修正論文の提出を受け、10月15日に論文審査委員会判定会議（論文審査委員による学位請求者に対する質疑応答と審査）をおこない、修正事項について適切に対応し改稿されていたとして、今後の研究課題も示した上で、合格と判定した。10月26日に公聴会（最終試験）を開催し、同日の臨床教育学研究科（博士後期課程）委員会において合否判定に関する討論をおこない、その後の投票により「合格」と決定した。